



江南の春

白石直典

当協会理事技術部長
工学博士

宗教者ならずとも、最近のわが国における物質文明の謳歌の世相には反省させられるものを覚える。一方、公害はほぼかたがついた如き風潮となり、そして環境アメニティ論、環境管理論というような高邁な理念が唱和されるようになってきた。しかしそれらの基調にあるものは便利性の追求のみがかくされているのであって、それ次第で価値感とやらが左右される土台の上に立った環境管理論であるような気がする。ところがヨーロッパとなると事情が異なる。第2次大戦後、破壊されたガレキをかたずけてまず何をしたかという、昔と寸分違わない街並みの復元作業から始められた例が多いといわれている。ワルシャワはその点で余りにも有名らしいが、ドイツを始め西欧各国でも古い街並みが相当にあるようである。そして数世紀後の現在でも、そこで市民生活が静かに続けられているのである。日本では法隆寺という世界最古の木造建築物はあっても、昔の街並みそのままの生活体で維持されている所は極めて少ない。結局、快適環境とは民族性に由来してニュアンスが違ってくる。すなわち、日本では昨年度国土庁が市町村を対象として行ったアンケート調査結果からもわかったように、とにかく気短かに便利性を求めることがホンネのようであり、ヨーロッパでは古いものに執着する意識のもとに、己の安らかな環境圏を形成するものようである。それでは、中国では如何なる事情にあるのであろうか。

私は1956年と1958年の2回中国を訪れたのであるが、2回目のとき経験した無錫から蘇州までの3時間に及ぶ運河の旅は、まことにダイナミックで人間味に満ちた印象を与えて呉れた。中国では昔から南船北馬といわれる

ように、隋の時代から、南では部分的に黄河の流れや過去の流跡を利用しながら、運河が広い大陸を網の目のように堀られ、その長さは4000キロメートルにも及び、交通の大動脈を果たして現在に至っている。江南江蘇の良質米が運河によって洛陽に運ばれ、シルクロードもここを基点とした。洛陽の紙価を高からしめたものは、文化の発達した江蘇その他の各地から、すべてはこれらの運河によって長安の都にもたらされたのである。万里の長城は世界最大の建造物といわれるが、これらの運河群も、その規模においては万里の長城以上ともいわれている。以上の予備知識をもって私はこのクルーズに参加したのであった。

無錫市内の大きい機械工作工場の中を通り抜け、そして乗りこんだ船は、約50人乗り程度の遊覧船であった。運河の幅は広い所で100メートルもあろうか。ここは江蘇省内の交通の大動脈である。行き交う船の数は夥しい。

私達の船以外はすべて貨物船である。中には写真のように何艘も連結してかなりの速度で進む勇ましいものも多く、このタイプのもはなかなかのど迫力を示す。しかし中にはまったくの小舟もいる。これらはいわゆる親子か夫婦が操っている。小さい子供を乗せているのも多い。これらとすれちがう度に、また追いつく度に手を振ると、子供達は瞬間はにかんだ様子を見せるが、やがて笑顔となりそして手を振り始める。その間少し時間がかかるが、なにぶんにもこのような遊覧船はまだ見たことがないのでとまどうのか、また日本人に似てはにかみ性なのだろうか。岸辺すれすれに立ち並ぶ家からは、石段が水辺に下りていて、ここで食器を洗う人、洗濯をする人、魚を釣る人やそれを見守る子供達、隣同志向かい合った台所でしきりに話し合っている人達、土間の外に出て大きいドンブリ鉢の中の何かを食べている人、バリカンで散髪してもらっている子供、自転車のパンクを修理



している人、赤煉瓦を積み重ねて小屋を造っている人、数人が輪になって大笑いしている人達、もう次から次へと裏口のありのままの情景が展開される。まさに台所から今日はある。集落が外れると青い麦畠と黄色い菜の花とが織りなす田園地帯が続く。その美しい中で、女先生に連れられた幼稚園の子供達が手を振る。3000年の昔から強大な帝王が次から次へと変っては、良民を苦しめてきたこの国では「メシを食ったか」が日常の挨拶となっていたほどメシにありつくことが重大事であった。しかし、何千年目にしてようやく「メシを食ったか」は過去のものとなった。これを成し遂げた現代の革命家達の偉大さにはただ驚嘆の念を覚える。今、眼前に展開されている人達は、平和を享受し、己の環境に安心していることだろう。数年前、日本に留学していた吉林大学の魏先生が私の家で、「研究と教育を行う上で不自由はありません」と。また帰国して1000人の職員を擁する研究所の所長に就任した楊先生から、昨年暮に届いた便りによると、「職員の住宅を確保してやるのは骨が折れるが……」とはあったが。楊先生が日本に居られた頃、「日本人は大変ですね」と言った言葉を思い出す。何が大変かという、「日本人は忙しい」ということであった。言いて妙である。日本における快適環境とは、忙しさを克服しなければ得られないことのようなのである。それとは別に、楊先生はしみじみとこんなことも言った。「中国は貧しいんですよ……」と。私は「何が貧しいのですか、貴国には5000年という素晴らしい歴史がある。それによって育かれた日本人にはない素晴らしい心があります。そして己の死後に汚名を残さないことを至上の心がけとする民族であ

ると聞いていますが」と。中国における快適環境を考えるならば、それは今ごく自然に求めまた得られているものであろう。船上から展開されるさまざまな光景を見ているうちに、いつしか私も昔あそこに住んでいたかのような錯覚にとらわれる。

千里鶯啼いて緑紅に映ず

水村山郭酒旗の風

南朝四百八十年

多少の楼台煙雨の中

杜牧(803~852)

江南の春は何時までも続いて欲しい。アメニティとはラテン語で愛という意味であることを思いながら。

